

ジシカ平沢

一九八一年八月三〇日

一二時、下降開始。ジシカ平沢は、大谷地沢と違って、顕著な滝はない。苦労することなく下降を続け、四〇分で大谷地沢との合流点まで下って

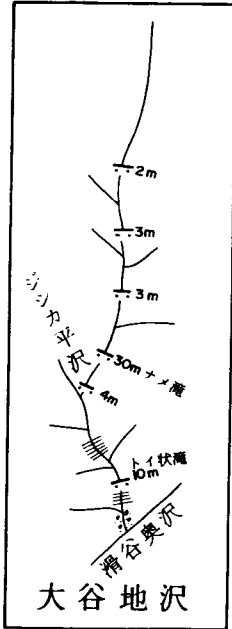
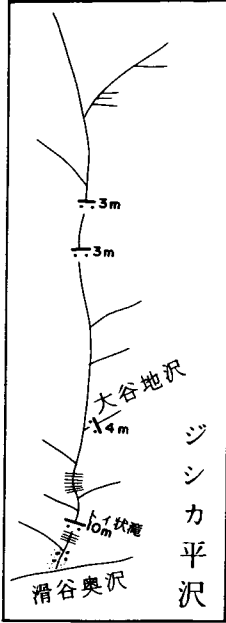
しまった。
 「タイム」 尾根(一二:〇〇) ↓ 大谷地沢出合(一二:四〇) ↓ 滑谷奥沢出合(一三:〇〇)

大谷地沢

一九八一年八月三〇日

九時五〇分、大谷地沢に入る。最

初は河原状、続いて滑谷沢本流上流



「タイム」 大谷地沢出合(九:五〇)

これを越すと、小さな滝がいくつか現れるが、まもなく水が濁れる。左側にヤブをこいで、先ほど分かれたジシカ平沢の下降に移る。

部のような青みがかったナメ床が続く。しばらくナメ床を遡ると、一六一ピクから派生している尾根によって沢が二分されている。右が大谷地沢、左がジシカ平沢である。大谷地沢に入る。出だしの四匹の滝は左岸に登る。すると沢は左に曲がり、正面に三〇匹のナメ滝を落している。

↓ジシカ平沢出合(一〇:二〇)

↓尾根(一一:三〇)

滑谷奥沢(仮称)

一九八一年八月三〇日

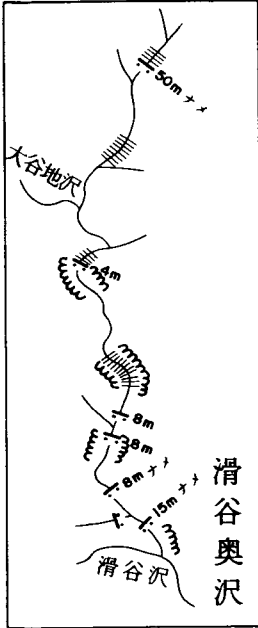
烏川にかかる橋から、旧一三号国道を滑谷沢出合まで約五〇分歩く。

六時三〇分、滑谷沢本流の下降開始。はじめはゴーロ状であるが、中ころから沢床がグリーンの名メとなる。

滝を三つ程越えて八時、滑谷奥沢(仮称)出合到着。

すぐ一五匹ナメ
滝が現れ、我々を喜ばせる。その先五分足らずでまた八匹ナメ滝。そして二〇分後に、今度は完全な滝八匹。

ここは左岸を直登する。この次の八匹もわけなく直登して進む。
五〇匹ほどのナメ、四匹の滝、小さなナメと過ぎ、ゴーロ状となったところが大谷地沢分岐。ここで相前後して進んできた萩原パーティと別れる。



温帯の代表的な樹木②

ミズナラ(ブナ科)

ミズナラも、ブナと同様、日本温帯を代表する樹木の一つである。ブナのあるところミズナラも必ず存在するといつてよい。樹皮は黒褐色で、縦に規則な裂け目があり、樹高は三〇匹近くになる。

材は建築材や器具材として広く使用されている。変わったところでは、ビールの樽材としても使用されている。

薪炭材としても多く使用されていたが、材の中に水分が多く、燃えにくい。名前はこんなところからついたようである。

(大西)